小児科だより vol.8

インフルエンザが治る頃に歩けなくなる？

2017.4.3 発行

こんにちは。一日毎に日が長くなり、暖かく感じる日も増えてまいりました。小児科外来では、インフルエンザが徐々に終息して、春に流行するヒトメタニューモウイルスやライノウイルスなどの患者さんが増えてきている印象を受けます。咳や鼻水に続いて、喘鳴（ゼイゼイ、ヒューヒュー）を伴うことあり、小児喘息の発症にも関連するといわれるウイルス感染症のため、症状のある方は早めの受診をお勧めします。

さて今月の小児科だよりは、今シーズンの流行も終わりに近づいているインフルエンザウイルスによる、良性急性筋炎についてのお話です。

インフルエンザの典型的な症状である発熱や咳などが回復するころに、突然足を痛がって歩けなくなり、数日から 1 週間程度で回復するというものです。国内外の文献報告では、6 歳前後の男児に多く見られ、インフルエンザ患者全体の 1%程度に合併するとされています。左右ほぼ対称にふくらはぎの筋痛を訴えて歩行困難になるのが典型例で、尖足歩行（つま先たちで歩く）や大腿部（太もも）の痛みを訴えることもあります。一方、インフルエンザの初期にしばしば全身の関節痛や筋肉痛を訴えることがありますが、その場合は通常歩行障害は伴わず、血液検査で筋肉の酵素が上がることはありません。（良性急性筋炎では、筋肉の酵素が上昇し歩行障害を伴います。）

この良性急性筋炎は歩けない以外はけろっとしていることがほとんどですが、これとは全く異なる合併症の一つに、横紋筋融解症というものがあります。こちらは、全身状態が非常に悪くなり全身の筋肉が侵されることが多く、まれに腎不全などから死に至ることもあります。

良性急性筋炎では、原則安静のみで自然に回復します。抗インフルエンザ薬によって、筋炎が予防できるという明確な根拠はありませんが、抗インフルエンザ薬が登場する前と比べて筋炎が減っているという報告があり、これが発症早期からの治療によるものかはまだわかっていません。